歴史意識とアーカイブズの可能性

加藤聖文（会員）

日本人は歴史好き？

「アーカイブズ」とは耳慣れない言葉ですが、昨今の公文書をめぐる森友・加計問題というと誰もが聞いたことがあるでしょう。この問題は、作成されていなければならない公文書がなかったばかりか、書き換えられていたというあり得ない話まで出てきたことで前代未聞の「事件」となりましたが、要するに公文書の管理がいい加減だったということです。アーカイブズとは、公文書を含めて人間や組織が生み出した記録を正しく管理して役に立てることを意味します。すなわち、モリカケ問題はアーカイブズ問題といえます。過去に年金記録の管理が杜撰で大問題になったことがありますが、これもアーカイブズをめぐる問題です。

このように日本では定期的にアーカイブズ問題が浮上し、世間で大騒ぎとなりますが、一定期間が経つとみんな関心が薄れてしまって、アーカイブズの根本的な課題はそのまま「放置」されてしまいます。おそらく、しばらくしてからまたもや杜撰な記録の管理が発覚して大騒ぎするけど、また忘れて…ということが繰り返されるのでしょう。

ある意味において日本人は同じ失敗を繰り返す民族です。歴史の荒波に翻弄されるところに住んでいた他民族ならとっくに滅んでいたでしょうが、世界のなかでも僻地にいたことが幸いして今でも生き残っています。ただこうした幸運もたまたまであって、世界がつながって僻地がなくなった現代において、日本人が将来も生き残ることができるかは保証の限りではありません。

さて、こうした同じ失敗を繰り返すのは、過去に対する関心の低さ――すなわち物事を長い時間軸で思考しない――という習性に起因すると思われます。

日本人は歴史好き――なんていうことを耳にしますが実態は真逆で、これほど歴史を軽んずる民族も珍しいでしょう。正しくいえば「歴史」ではなく「物語」が好きなのです。例えば、『平家物語』は物語ですが、『吾妻鏡』のような公式記録（史書）と同列に扱われがちです。むしろ、教科書みたいに淡々として味気ない『吾妻鏡』より、登場人物が多彩で生き生きとしている『平家物語』のほうが「これが歴史だ」と思われがちです。歴史教科書が事実の羅列でつまらない、

もっと国や民族に誇りを持てるような内容にすべきだという意見がありますが、これも根本的には歴史と物語を混同していることのあらわれです。

例えば、一般的に広まっている坂本龍馬像の大半は、司馬遼太郎が作り上げた人物像を無条件に信じて、坂本龍馬はこんなにすごかったと勝手に思っているに過ぎません。人間というものは神ではありませんから、不完全で矛盾する生き物です。これは庶民であろうと同じです。だから面白いのであって、完全な人間ほどつまらないものはありません。

しかし、日本人は良い人は良い人、悪い人は悪い人ととかく人間を単純化して理解しようとします。とりわけ有名人は完全無欠にされがちで、町おこしのようなイベントに使われるようになるとステレオタイプの「立派な人」になってしまいます。坂本龍馬はもちろん、近年では杉原千畝なども当てはまります。人間もこのような扱い方をしますから、出来事も同様でとかく単純化しようとします。要するに、日本人は現実を直視したがらず、あって欲しいこと（願望）とあったこと（事実）を一緒くたにしてしまう傾向が強いのです。

フランスの歴史学者のマルク・ブロックがいっていたように、西欧文明の土台であるギリシア・ローマ文明もキリスト教もその根幹には「歴史」があります。とくにキリスト教の中心命題である人間の原罪（過去）と贖罪（現在）、そして救済（未来）の壮大なドラマは、過去から未来への長い時間軸――すなわち歴史として展開しています。ゆえに、ヨーロッパ人は程度の差はあれ彼らの思考と行動の背後には歴史意識があって、常に過去に遡って物事を理解し、未来を考えようとします。だから、当たっているか正しいかはともかく、社会の法則性を発見したり、新しい価値観を創造することに長けているのです。

ヨーロッパの大学では歴史学と哲学が教養の根幹にあって、大学生ならだれもが学ぶのはこのような理由があるからです。ちなみに、日本の大学では歴史や哲学は実用的ではないということで肩身の狭い立場に追いやられていますし、ヨーロッパでは大学の顔ともいうべき歴史学部なんていう学部もありません。誰もその必要性を感じないということは、誰も歴史に興味がないということです。そして、日本人の思考や行動は歴史意識に裏打ちされたものではないということでもあります。

アーカイブズとは何か？

歴史意識は、自己の行動基準として過去を強く意識することでもあります。また、過去の出来事を直視するなかから歴史観というものが生まれます。勝手な思い込みや都合のよい解釈からは何も生まれません。ただ、複雑な人間の行為の結果である過去の出来事を直視することは簡単ではありません。また、複雑すぎてよくわからないことばかりです。歴史というものは向き合えば向き合うほどわからなくなるものなので、人びとはあるところで思考を停止して歴史にわかりやすさを求めるようになります。歴史的大事件はユダヤやフリーメイソン、はたまたコミンテルンといった闇の組織によって引き起こされたといった陰謀史観のようなトンデモ話を信じてしまうのもこういった歴史のわかりにくさが一因ともいえます。

かように一筋縄ではいかない歴史を学問として取り組むには、時間をかけて一つ一つの過去の記録を読み解いて自分なりに解釈して仮説を立てて立証していくという地道な方法しかありません。そこ

では願望や憶測に邪魔されず記録に書かれている事実を直視することが重要になります。

ただし、歴史を明らかにしたくても記録がなければ何もわかりません。そのためには人間や組織の行為の痕跡である記録がきちんと作成された上で保存管理され、一定期間が過ぎると人びとが自由にアクセスできる仕組みが整っているかが重要になってきます。これが「アーカイブズ」です。

「アーカイブズ：Archives」とは「アーク：Arc」という櫃を意味するラテン語から派生した言葉で、「大切なものを保管する」といった意味があります。現代では、少しややこしいですが、過去の記録を保管する施設を指す場合と施設に保管されている過去の記録を指す場合の２つの意味があります。

日本にはアーカイブズに該当する言葉も概念もありませんでしたが、戦後になって施設は文書館（または公文書館）と言われるようになりました。一方、過去の記録の場合は今でも適切な訳語がないので、ここでは歴史記録（歴史化した記録）としておきます。ちなみに、中国では施設を檔案館といい、保管されているものを檔案といいます。また、韓国では最近になって施設は記録館、そこに保管されているものは記録物と呼ばれるようになりました。

アーカイブズは直接的には統治のあり方と関係します。国家というものが成立すると人民や土地を支配するために関連する記録が必要になり、さらにはそれらの記録を効率的に管理する制度が生まれます。アーカイブズという概念はメソポタミア文明の頃から存在し、ギリシア都市国家でも記録は厳重に保管されていました。そして、ローマ時代になると記録を保管する大規模な施設が作られるようになりました。現在のローマ市庁舎は、古代ローマ時代の記録保管庫（タブラリウム）の上に建てられたもので、現存する世界最古の文書館（跡？）といえます。内部は見学もできますが、日本では弥生時代だった頃にローマでは現在まで耐えうる石造りの巨大かつ堅牢な記録保管庫が造られていたことに驚かされます。

ローマ以降も統治者である王家や貴族、教会は支配する人民や土地に関わる記録を保管してきました。また、教会では信者の出生から死亡にいたる個人の記録も残っています。ヨーロッパでは家系探しが盛んですが、ヨーロッパのあちこちに移住を繰り返していても各国の公文書館に保管されている教会の記録を辿れば中世まで辿ることも可能です。

ちなみに、日本では旧家にある家系図の大半は江戸期に作られた眉唾物で、正確な記録として辿れるのは明治以降に作られた戸籍しかありません。したがって、一般的には先祖は最初の戸籍（壬申戸籍：一八七二年）に記載されている戸主（大概は江戸後期の生まれ）まではわかります。それ以上となると檀家寺の過去帳が唯一の記録となりますが、どこでも残っているわけではありませんし、公的機関で保管されているわけではないので、ヨーロッパほど自由に探し出せるものではありません。また、檀家制度が確立して過去帳が作られるようになったのは一七世紀中期に入ってからですので、辿ることができても江戸時代初期までが限界です。また、武家もほとんどは一六世紀以降の戦国末期からしかわかりません。すなわち、ごく一部を除けば旧家といえども日本人の大半はせいぜい一七世紀くらいまでしか先祖を辿ることができないのです。

日本人は「日本人」という民族性を語るのが大好きで、やたらと「血統」にこだわりますが、そのくせ自身のルーツに無関心です。つまり自身が何者であるか

についてあまり深く考えない「とりあえず日本人」が大半で、その根拠も曖昧なものです。

話が脱線しましたが、ローマ時代から一八世紀までアーカイブズは統治者のものでした。これは文字を読み書きできる人が支配階層に属する一部の人に限られていたからでもあります。こうした特権的な性質が大きく変わるのが一八世紀後半に起きたフランス革命です。

近代の始まりともいわれるフランス革命によって、領主と領民という統治モデルが否定されて国家と国民という新しい統治モデルが生まれました。この際、重要となったのは国民が政治主権を持って国家を運営するために、国家が統治の記録を管理するだけではなく国民のアクセスを保障するということでした。その結果として誕生したのが公文書館です。

ローマのカテナリウム（建物下半分のレンガ部分）

現在、世界のどの国でも国家の記録を管理する国立公文書館が必ずあります。その先駆けとなったのがフランス国立公文書館で、国家の記録を管理して保存すると同時に国民に公開するというシステムは世界標準となりました。

わたくしは研究のために世界の公文書館を訪ねることが多いのですが、どこも残すべきものは残して、誰にでもオープンにしていることに感心します。ドイツは第二次世界大戦で戦場となって多くの記録が失われましたが、日本と比べるとナチス政権時代の公文書も良く残されています。なかには、日独伊三国軍事同盟締結までの日独交渉に関する記録もかなり残されています。一方、日本側は松岡洋右外相のスタンドプレー的な要素が強かったので詳細な交渉記録を作成していなかったこと、さらには敗戦時に焼却処分したこともあって、ほとんど残っていません。すなわち、三国同盟の研究をする場合、ドイツ側の記録に依拠せざるを得ないのです。

ヨーロッパで感心するのは、都合の悪い内容の記録でもちゃんと残されているということです。先ほどのドイツもそうですが、戦後にソ連の影響下にあった東欧諸国やバルト三国、さらにはロシアでも共産政権時代の記録は残されていて、今では公開されています。日本ではおそらく、都合が悪いからとか自分もしくは誰かに迷惑をかけるといった忖度が働いて廃棄してしまうようなものでも公文書館に行けば誰でも見ることができます。

意外かもしれませんが、共産主義国は強力な統制国家なので公文書管理は徹底しています。旧ソ連の公文書は、それこそメモにいたるまで残されていて、詳細な決定過程がわかります。例えば、張鼓峰事件で現地の司令官とスターリンの電話でのやり取りまで記録化されています。ちなみに、フランス式とソ連式の公文書管理システムの違いは、国民に公開する視点があるか否かです。それを除けば、ソ連式の方が徹底しています。また、ソ連式は共産主義国家に移植されました。ベトナムではベトミン時代からソ連の軍事顧問団が協力していますが、そのなかに文書管理のシステム作りも含まれていました。その他、中国もソ連式の影響を

受けています。したがいまして、中国の公文書管理は徹底したもので、国民に対する公開という視点を除けば、杜撰さが目立つ日本の比ではありません。

この他にも、世界では行政機関なら国だけではなく地方自治体も含めて公文書館が必ず設置されています。日本では都道府県で公文書館が設置されているのはようやく八割近く、市町村になるとごくわずかしかありません。また、世界の大学や教会、企業にも文書館があります。面白いのはロシアではボリショイ劇場のような文化施設にも文書館があって、帝政ロシア時代以降の台本から役者への支払調書、さらには衣装から小道具まで残されていて、帝政ロシア時代の演劇をそのまま再現することができます。

日本では劇場はもちろん、大学や寺社や企業にも文書館はほとんどありませんし、あっても文化広報施設のような扱いですが、海外ではその組織のアイデンティティを証明する場所であるとともに研究の素材を提供する場でもあります。また、アメリカの企業などでは訴訟対策用の資料保管――すなわち組織防衛――という役割も任っています。

とにかく、海外では組織という組織には文書館が整備されていますし、保管されている歴史記録も豊富なので研究がとてもやりやすく、やる気さえあれば研究の質が高められるという利点があります。

日本になぜアーカイブズは根付かないのか？

日本は明治になって近代化を進めるなかで西欧の政治システムを取り入れていきましたが、アーカイブズに関しても当初は西欧のモデルを導入しようとしました。しかし、それは早い段階で形骸化してしまい、政府の記録（公文書）の管理は制度化されずに放置されて現在にいたってしまいました。

一九世紀後半から国家の規模が拡大するとともに行政の肥大化が起きたため、政府で作成される文書量が膨大になっていきました。日々大量に生み出される文書に管理が追いつかなくなった結果、管理体制が不十分になることは二〇世紀初頭の世界共通の傾向でした。現在では世界一の規模を誇る国立公文書館を抱えるアメリカも一九世紀までの連邦政府は小さなものでしたが、第一次世界大戦以降、政府機能が拡大して文書量が膨大になったものの、適切に管理できる施設もありませんでした。

ワシントンD.C.にある米国立公文書館本館
（第一次世界大戦後の公文書は郊外の巨大な新館に）

実は、アメリカの公文書管理も当初はいい加減だったのですが、第一次世界大戦に従軍した兵士の記録が杜撰だったため、大戦後に恩給が支給できないといった日本の年金記録問題のような事件が起きました。そして、軍隊が出動する暴動騒ぎにまで発展した結果、公文書館を作ろうということになりました。当初は単なる文書の保管庫のようなものでしたが、次第に権限が拡大して連邦政府からの文書移管が制度化されていきました。さらに、第二次世界大戦でアメリカ政府の規模がますます巨大になると文書量の激増

に対処するため、政府機関内での文書の作成段階から公文書館がマニュアルを作って関与することになり、戦後になって強力な権限を持つ公文書館となりました。そして、現在では大統領の個人文書からホワイトハウスのウェブサイトのデータにいたるまで公文書館へ移管されて国民に公開される仕組みになっています。

世界的にも第一次世界大戦前後から公文書管理をめぐる課題が浮上して、各国では一九三〇年代に公文書館の整備が進められました。一方、日本は世界の潮流から孤立していました。敗戦による占領期に政治の民主化が図られても公文書館を作る計画はありませんでした。日本は大戦前に公文書管理のシステム化が行われないまま敗戦を迎え、その間に多くの公文書が失われました。そうした反省から公文書館が必要だといった意見もあったのですが、社会的関心も広まらずなかなか実現されませんでした。結局、日本で最初に公文書館ができたのは国ではなくて山口県でした（一九五九年）。それ以降、いくつかの地方自治体で公文書館が誕生した後、一九七一年になってようやく国立公文書館が設置されました。

ただ、この時は受け皿ができただけで、省庁で作成された公文書が自動的に移管される仕組みはなく、相変わらず文書管理はいい加減でした。その後、年金記録問題などが起きて社会の批判が高まった結果、二〇一一年になって公文書管理法が施行されて、ようやく世界並みに公文書を作って残して公開する仕組みはできました。ただ、それでもモリカケ問題のようなことが発生していますから、中身はまだまだといったところです。とくに公文書とはどこまでを範囲とするか――例えば、職員のメモは私的なもので公文書ではないなどといった次元の低い議論をしています。ちなみに、アメリカでは職員のメモも公文書として扱われて公文書館に収められています。

このような文書管理のいい加減さは、お役所ばかりに限った話ではなく、民間も大同小異です。企業は企業統治（コーポレイト・ガバナンス）がうるさくいわれるようになってから文書管理の関心が高まりましたが、つい最近まであまり意識していませんでしたし、マスコミも政府を批判はするけど自社の記録管理には今でも無関心です。さらに、政党も記録管理がいい加減で、記録管理のワーストはマスコミと政党が双璧といえます。ちなみに、日本の企業のなかでも満鉄は珍しく文書管理がしっかりしていました。

満鉄の文書課長は出世コースでしたが、文書管理は情報管理と置き換えられます。つまり、業務から人事まで社内のすべての情報を握るのが文書課だったのです。

一般的に日本の組織は現在を起点にして未来（といっても一年先程度ですが）を見るだけなので、終わってしまった過去のことに誰も関心を向けません。過去の記録は社史でも作るときの材料に過ぎず、社史を作ったら用済みで廃棄して当然といった認識です。とくに、役所が顕著ですが、政策評価という発想がないので、実施している政策が妥当かどうかを検証することもなく、一度決めたら見直さないということになります。原発政策や新幹線整備計画のように当初の計画段階ではそれを必要とした前提（電力の安定供給や高速交通網による地域発展など）が、時代の変化によって必要ではなくなることは当然起きうることです。そこで、定期的に政策評価を行うことで政策の修正（方針転換や廃止を含めた）を行うほうが効率的ですし、税金の無駄遣いを減らすことにつながります。

なお、ここで触れている政策評価は、最近はやりの業務評価とは異なります。近年は官民どこでも「評価」が流行していますが、役所ではそれが顕著で、業務

評価はＰＤＣＡサイクルの一環とも位置づけられてあちこちで行われています。ただ中身となると、業務の遂行が計画に比べてどこまで進んでいるかばかりに焦点が当てられ、外部有識者を交えた検証委員会の評価も「概ね進んでいる」レベルの評価しか下せずほとんど定型化しています。結局のところ「失敗した」ということはあり得ない（または考えてはいけない）ということ――つまり現実を直視しない――を前提としているため形骸化は必然となるのです。

政策評価とは現実を直視し、失敗はあり得ることを前提とするものです。そして、この政策評価を行う場合、過去の政策立案から決定までを検証する作業をしなければなりません。そこで必要なのが過去の記録になるわけです。すなわち、公文書は業務の検証と将来の新しい政策立案に不可欠のものであって、これが残っていないと検証はできません。しかし、弁証法的思考が苦手な日本人はとかく批判されることを嫌います。その結果、現実を直視するのを避けようとして、証拠となるような文書を捨てたり改竄したりしますが、それでは同じ失敗を繰り返すだけです。

人間は不完全な存在ですから、当然失敗します。ただ、不完全でも学ぶ能力はありますので、同じ失敗を繰り返さないことはできます。そのためには何がどこで間違ったのかを検証する必要があり、それ故に公文書を残さなければならないのです。

また、こうした記録は「情報」に置き換えられます。それ単独ではどんな意味があるかわからない記録でも蓄積されることで有益な情報を生み出すことがあります。すなわち、あらゆる記録（行政情報）を蓄積することで今後の政策立案に役立つかもしれません。いわば公文書館は情報の宝庫なのです。世界的にトップクラスの公文書館を持っているのはアメリカとイギリスですが、彼らは情報の本当の価値をよく理解しているといえます。

日本人はとかく情報というと新しいものと捉えがちですが、情報は「厚み」が重要で、新しければ良いわけではないのです。この点でも日本はまだまだ世界から学ぶべきことが多いといえましょう。

最後に、公文書館には政府の記録ばかりではなく、個人の記録もあります。イギリスの国立公文書館はいつでも閲覧者で満席ですが、彼らの半数はルーツ探しでやってきます。英国立公文書館には教会の記録なども移管されていて、公文書に加えてこれらを併せて調べることで自分の先祖を見つけ出すことができるのです。また、アメリカの国立公文書館にも移民関係の記録もあって、ルーツを調べることができます。いわば、欧米の公文書館は国民一人一人のアイデンティティの保管庫でもあるのです。

このように、アーカイブズは様々な可能性を秘めたものです。日本もアーカイブズに対する関心を高めることで、よりよい社会を作り出す契機にもなりますし、自らの歴史意識を深めることも可能になるのではないでしょうか。

筆者略歴（かとう　きよふみ）

１９６６年12月生。歴史学者。早稲田大学大学院文学研究科史学（日本史）専攻博士後期課程修了。現在人間文化研究機構国文学研究資料館准教授。専門は日本近現代史・東アジア国際関係史・アーカイブス（歴史記録）学。近年は海外引揚研究を中心に活動している。主な著書に『満蒙開拓団』（岩波全書、２０１７年）、『国民国家と戦争』（角川選書、２０１７年）、『「大日本帝国」崩壊』（中公新書、２００９年）、『満鉄全史』（講談社選書メチエ、２００６年）、他多数。